

作成：水野晴仁（2015.3.6）

アドラー心理学に基づく

勇気づけの子育て入門（学校編）

～ほめない、叱らない、勇気づける

内容

1. 子育ての目標.....	4
2. 人間の行動原理.....	4
3. 子供が、好ましくない行動をとるときの目的.....	5
4. 4つの目的とは.....	5
(1) 注目を引く.....	5
(2) 力を誇示する.....	6
(3) 復讐する.....	7
(4) 無気力・無能さを示す.....	8
5. 子供と仲良く暮らすには.....	8
(1) 子供の「存在」そのものに、敬意と尊敬の気持ちをもつこと。.....	8
(2) いつも愛情を伝えること。.....	9
(3) 子供と楽しい時間を持つこと。.....	9
(4) 子供にやる気を出させる先生であること。.....	10
(5) 子供との民主的な関係を築く.....	10
6. 問題行動に対する対処方法.....	11
【先生の注目を引く】ために問題行動をしている場合.....	11
【力を誇示する（先生に主導権争いを挑む）】ために問題行動をしている場合.....	11
【復讐する】ために問題行動をしている場合.....	11
【無気力・無能さを示す】ために問題行動をしている場合.....	11
7. 振り返るポイント.....	12
先生の「自己診断項目」.....	12
8. 子供の状況から分かる先生の態度.....	13
9. 好ましくない先生の言動について.....	14
10. 「叱る」ことをやめましょう.....	15
(1) なぜ、叱られるようなことをするのか.....	15
(2) 子供は叱られるとどうなるのか.....	16
11. ほめることの弊害.....	17
12. 賞と罰による教育の問題点.....	18
(1) 子供を罰することの副作用.....	18
(2) 子供に褒美を与えることの副作用.....	19
13. 勇気付け.....	20
(1) 勇気付けとは.....	20
(2) 勇気付けの効能.....	21
(3) 勇気をくじかれると子供はどうなるのか.....	22
(4) ほめたり叱ったり・・・の結果.....	22
(5) いかに勇気付けるか.....	23

14. ケーススタディ ～ 教室掃除をいつもサボっている子供への対応.....	26
【ステップ1】子供の「目的」を探る	27
【ステップ2】善後策を子供と話し合う.....	28
【ステップ3】新ルールの運用	29
15. 教育に行き詰まったとき	30
(1) 子供の能力を信じる	30
(2) 先生と子供は平等であると考え.....	30
(3) 先生も完全ではないのだと認める.....	30
(4) 子供だけが大切だと考えないこと.....	31
(5) 子供を助けよう	31
16. 参考文献.....	32

1. 子育ての目標

自分の教え子に、どんなふう to 育てたいですか？先生の数だけ、様々な理想像があるでしょう。本書では、教育の目標を、次のように定めたいと思います。

- ①人に思いやりの気持ちをもてるようになること
- ②自分の行動に責任をもち、みんなのために貢献できるようになること
- ③生活の問題を、自分なりに創意工夫して解決できる力をもてるようになること
- ④友好的に人と付き合えるような社会性を身に付けること

いかがでしょうか？こんな人に育ててほしいと思いませんか？

2. 人間の行動原理

本書の元になっているアドラー心理学では、人間の行動原理を次のように考えています。

行動原理①	<ul style="list-style-type: none">■人間は、社会的な存在です。■子供も大人も、自分の「居場所」を求め、そこに「所属」したいという気持ちを持っています。
行動原理②	<ul style="list-style-type: none">■すべての人間の行動の裏には「目的」があります。■人の行動は、それが、どういう「目的」のために行われているかが分からなければ理解することはできない。■人の行動の大半は、自分の「居場所」を見つけたり、確保したりするために向けられています。
行動原理③	<ul style="list-style-type: none">■人間は、意思をもち、決定する生き物です。■人間は、しばしば、特別に意識することなく（自分では気がつかないで）本当にしたいことを決めています。
行動原理④	<ul style="list-style-type: none">■人間は、いくつかの「部分」的な特性だけを見ても、その人の「全体」を捉えることはできません。■人間の「全体」は、その人の「部分」を足し合わせたものより大きいものです。
行動原理⑤	<ul style="list-style-type: none">■人間は「現実」を「あるがまま」に見ているのではなく、ただ、その人が「解釈」するように見ているだけです。■「現実」は一つでも、物事の「捉え方」や「解釈」の仕方は、人によって異なるものです。■その人の「知覚」や「認識」は、主観的なものなので、間違っているか、偏りがあることは避けられません。

3. 子供が、好ましくない行動をとるときの目的

先生からみて、子供の行動が、「好ましくない」と見えるときは多々あります。子供の「良くない」行動を見つけたとき、先生たちは、よく、その「原因」を探りますね。アドラー心理学に基づく教育論では、「原因」ではなく、その子供の行動の「目的」を探るというアプローチを取ります。

子供が「好ましくない」行動を取るとき、子供の中には、何かしらの「目的」があります。つまり、何かの「目的」があって、好ましくない「行動」を取るのです。

子供の「好ましくない行動」の「目的」は、次の4つのパターンに集約できます。①から順に進み、どんどんとエスカレートして④まで進みます。

【第1目的】注目を引く

【第2目的】力を誇示する（主導権争いを挑む）

【第3目的】復讐する

【第4目的】無気力・無能さを示す

4. 4つの目的とは

それでは、これから、これらの4つの目的について、それぞれ、詳しく説明していきます。

（1）注目を引く

子供が、好ましくない言動を取る際の、第一の目的は、周囲の人たち（先生、友達、先輩、後輩、親、きょうだい等）の注意を引くことです。これは、精神的に幼い子供の行動に見られますね。

子供は、多かれ少なかれ、自分が「小さくて、弱くて、力がない。」と感じやすく、それ故に、「周囲のみんなと一緒に生活している。」という実感が欲しいと願っています。

「仲間はずれになりたくない。」「部活動の部員でいたい。」など、何かしらの「組織」に「所属したい。」という願望というのは、子供に限らず、人類共通のものであるともいえます。

もし、周囲の人たちから注目を集めたり、関心を引こうとしたりして、それが成功すれば、その子供は、みんなと一緒にいると実感して安心するのですね。

これが、「賞賛を求める」目標です。良い行いで注目を引きたいという感じですね。「褒められるようなことをするのなら、良いではないか。」と多くの先生は考えると思いますが、褒められるという「賞」が欲しくて行う言動を、アドラー心理学では「人として好ましいものではない。」とします。

なぜ、好ましくないのかというと、子供が「賞賛を、得るため」に行動しても、それが他者の注目を集めることができなければ、自分の良い行為は報わなかったという気持ちだけが残ってしまうからです。このやり方では、自分の行動の「価値」は、常に他者の「評価」に依存してしまう、ということになります。注目が得られなければ、落胆するしかありません。実際の現実には、子供にとってシビアです。好ましい行動と思ってしたこと、周囲から「そんなの、できて当たり前だ。」「やるのが当然だ。」という評価を受ける事もあるし、また、そこまで否定的な反応ではなくても、だれも関心を示さず、あるいは、気付く事すらない、ということもあります。

そもそも、人に評価をしてもらえようが、もらえなかりょうが、自分が良いと思うことを、自分の意思でやりぬく事ができる人に育って欲しいのです。

例えば、廊下にごみが落ちていたとします。それを、先生が見てくれていれば、拾ってゴミ箱に捨てるが、誰もいない廊下では、ごみが落ちていても放置するというのは、いかがなものでしょうか。

別の側面もあります。「賞賛を受ける」目的で行動し、注目を得る事に慣れている子供は、それに失敗すると、一転して、「好ましくない言動で注目を引く。」ようになりやすいのです。

先生は、僕の（あるいは私の）、良いところを全然見てくれない。ならば「仮に叱られたとしても、悪い行動でもしなければ、注目を得られない。」という意識が働いたり、あるいはそこまで意識しないとしても、好ましくない行動で注目を集めようしたりするようになってしまうのです。

子供が、何度叱っても、懲りずに好ましくない言動をしたとき、その子供に対して、あなたがどのように感じて（例：イライラした、うるさいと感じた）、どのように対応したのか（怒鳴りつけた、罰を与えた）をよく振り返ってみてください。

子供は、「注目を引く」という目的をもって行動し、あなたが、その目的に沿う形でその子供に「注意を与えた」ということであれば、これは、その子供の策略にまんまとはまったということになります。

子供を厳しく注意し、一度はそれが収まったとしても、しばらくするとまた同じ行動をすとか、別の方法であなたを煩わすようであれば、この目的で行動しているとみて間違いのないでしょう。子供は、あなたにかまって欲しいです。

（２）力を誇示する

子供の好ましくない言動の目的は、自分の力を周囲に示し、力（権力、主導権）を得ようとする、というものです。

この目標に向かって行動している子供は、人に命令できたり、自分の思い通りに行動できたりしたときに、自分に存在価値があると感じているのです。

「先生の言うとおりにほしくないからな！」とか、「私の思う通りにしなくちゃだめだ。」と考えています。「思い通りにさせない人は、自分を愛していないのだ。」と考えていますので、抑え付けようとするほど激しく反発します。このような子供は、言い争ったり、すぐに怒ったりしますし、大人に従順ではありません。嘘をつくこともあります。言いつけられたことは、少ししか行わなかったり、まったくしようとしなかったりします。

もし、あなたが子供の言動にカッとなったり、叱りつけたり、抑え付けてやっつけてやりたい衝動を感じたりするのであれば、それは、子供がこの目的で行動している可能性があります。

あなたが叱っても、その行動をやめるのがその場限りであったり、今まで以上に反抗したりするのであれば、子供はこの目的で行動しているとみて間違いありません。

主導権争いに負け、「力」で注目を得られなかった子供は、次に、「(3) 復讐」を試みるでしょう。復讐にも失敗すると、「(4) 無力・無気力」であることを装って関心を引こうとします。

(3) 復讐する

どうして復讐することが目的になってしまうのでしょうか。子供がこの目的をもっている場合、ひどくやっつけられたとか傷つけられたと感じています。先生、友達、親との主導権争い、つまり、どちらが支配権を握るかの争いに負けてしまった、自分の思い通りにできなくて、こっぴどくやっつけられたとか、注目をしてもらえず無視されてしまったとか、自分が価値のない人間であるように言われたり扱われたりしたことがあって、とても傷ついている場合です。こんな状況になると、相手に勝つ代わりに仕返しをしたい、深く落胆させられたので恨みを晴らしたいと考えます。そうすることによってのみ、この世に自分の居場所があると思えるのです。それは、自分を傷つける人間には力があると思込んでいるからなのです。

このように思っている子は、実は、自分がどうしようもないほど嫌われているし、みんなは自分に対して不公平だと思込んでいます。そして、自分に対抗してくる人を何とか傷つけようとします。ちょっとでもやられると、すぐに仕返しをしてやろうと考えます。面白くないので、弱いものいじめをしたりもします。その結果、周囲からは「嫌な子」「ひどい子」と見られます。この目的で積極的に行動すれば、「札付きの悪い子」になります。この目的の行動の一つとして不登校があります。自分を困らせ、傷つけた教師、自分をいじめたり馬鹿にしたりした級友、親へ復讐したいと考えるのです。

もし、「なんと意地悪い子なんだ。」「なんて嫌な子なんだ。」「よくもしてくれたな。仕返しをしなくちゃ。」などとあなたが思っていたり、その子供を嫌ったりしていれば、あるいは、あなたが子供にやり返していれば、この目標で子供が動いている可能性があります。

(4) 無気力・無能さを示す

この段階にいる子供は「自分に一切の期待をして欲しくない。」とっていますので、馬鹿なことをしたり、「何もしたくない。」「何もできない。」という態度を装ったりするのです。この段階は、第3段階よりもさらに自分に落胆しているので、励ましたとしても全く無駄か、逆効果でさえあります。なぜならば、「あまりにも自分はだめだ。」と思い込んでいるからです。だから励まされても逃げてしまうだけです。その一方で、あまりにも何もできないダメな人間だということが周囲の人に知られてしまうと、みんなから追い払われて自分の居場所がなくなってしまう、と恐れています。自分の居場所を得るために、みんなが自分に期待しないように無気力、無能さを装うのです。

あなたが、その子供にどんな働きかけをしても効果がなく、「どうしたらよいのか分からない。」「何をしても無駄だ。」「子供を諦めたくないが何ともならない。」などと感じていれば、子供がこの目標で行動している可能性があります。

5. 子供と仲良く暮らすには

いつも、子供と仲の良い先生は、それが「あたりまえ」のこのように付き合っていますよね。あなたが普段、子供と仲良く付き合うことは、その子供が困ったとき、助けて欲しいとき、「辛いよ、助けて。」とあなたに助けを求めることができる関係になり、あなたが、その子供に支援が必要だと思ったとき、それを子供が素直に受け入れることができるような関係になるために、最も重要なことなのです。では、子供たちと良好な関係を築くには、どうしたらよいのでしょうか。

(1) 子供の「存在」そのものに、敬意と尊敬の気持ちをもつこと。

アドラー心理学では、「大人と子供は、人間として対等である。」という前提で教育や子育てを考えていきます。大人と子供は、人間としての価値に差異はない、ということです。

しかし、実際の学校では、子供は先生に対して、敬意を払わなければならない、という考え方が根強くあって、先生を尊敬することを強要したりもしますね。覚えが無い？「何だ、その言葉遣いは。先生にタメ口を聞くな。敬語を使え。」「先生とすれ違うときは、自分から挨拶をしなさい。」などど目くじら立てて子供を叱ったことはありませんか？

先生は、子供から尊敬されたいと思うという気持ちは、自分が子供から敬意を払われるような存在になりたい、そのために努力して自分を磨こう、という事であればよいのですが、中々、そういった謙虚な姿をもつ大人は少ないのではないのでしょうか。

もし、本当に子供に尊敬されたいのであれば、まず最初に、あなたが子供を尊敬する必要があります。先生が子供を尊敬するのは、その子供の「行為」に対してではありません。その子供の存在、そのものを尊敬するのです。

考えてみてください。もし、子供が、あなたから大切思われていないと感じていれば、あなたを心から尊敬するでしょうか。ですから、尊敬するのは、先生であるあなたから始めてください。それには、子供に対して尊敬をしていないような言動は慎む事です。あなたにも尊敬している誰かがいますね。では、あなたは、尊敬すべきその人をけなしたり、命令したり、頭ごなしに叱ったり、罰したり、何度も同じ事をクドクドと注意したりするでしょうか。しないですよね。子供のすべき事に横から口を出したり、やる気を失わせるような言動も避けましょう。

アドラーがいう尊敬とは、「経験、実績のある大人は尊敬できるけれど、小中学生の子供は尊敬できない。」という表面的なものではないのです。

もう一点。あなたは、自分自身を尊敬していますか。もし、その答えが NO であれば、要注意です。自分の「存在」を尊敬できていない人は、人をけなしたり、品位を落としたりすることで、自分を上に立とうという傾向が強いのです。自分を尊敬しなさい、などと子供に強要するなんて、自分に自信がない証拠ですね。あなたが尊敬に値する人であれば、自然と周りの人は尊敬するでしょう。

子供から尊敬されていない、と感じるのでは、まずは、自分自身を、自分が尊敬するということから始めてみてください。

(2) いつも愛情を伝えること。

そう。当たり前のことです。できていますか。子供は、自分が小さいし力もあまりありませんから、不安になりやすいのです。安心して生きていくためには、愛したり、愛されたりする人が、最低一人は必要なのです。子供が、予期していないときに、「○○さんのこと、大好き。」といったり、優しく体に触れたり、抱きしめたりするのも良いと思います。子供が予期しているときだと、それが「ご褒美」になるので、避けるべきです。愛情は、ご褒美ではありません。子供を尊重する態度も、愛情を示すことになりますよ。

(3) 子供と楽しい時間を持つこと。

毎日、忙しいでしょうが、少しの時間でも子供たちと楽しい時間を作りましょう。時間がたくさんあればよいというものではありません。楽しくて充実した時間を、少しでもいいですからもつことが望ましいのです。放課に一緒に体を動かしたり、共通の話題で笑いを共有したり、読み聞かせなどをしたりするとよいでしょう。こうした取り組みは、子供の年齢には関係ありません。どんどんやりましょう。先生は怖い人ではなくて、十分に話ができるし、話を聞いてもらえたり、楽しく遊べたりする相手だということをお子さんが分かることが大切です。

(4) 子供にやる気を出させる先生であること。

子供にとって、人生の様々な出来事は、みんな初めてのことばかりです。子供はその問題を解決できるのかどうかと不安になりやすいです。できなければ、自分はダメな人間で、この社会の一員になれないのではないか、などと考えてしまいます。大人でも、困難な問題に直面すれば、戸惑ったり、うろたえたり、絶望したりするのですから、子供はなおさら、そのようになりやすいのです。

色々な問題を解決するにあたって、まず「できるんだ。」という自信が必要でしょう。先生には、子供に自信を持たせてあげてほしいのです。子供に自信を持たせる先生というのが、子供と仲良くなるための条件の必要なのです。

子供に自信を持たせるためには、では、どうしたらよいのでしょうか。これには、「勇気付け」が必要であると、アドラー心理学は主張します。勇気付けの詳細については、後述します。

(5) 子供との民主的な関係を築く

先生と子供の対等で平等な関係です。色々なことを話し合っ決めていく、ということです。様々な問題を、よく話し合っ、みんなの同意を得て決めていくのが大切です。みんなが平等で、それぞれの能力に応じて、みんなのために役立てれば、いいではないですか。そうしていくなかで、先生と子供、そして子供相互の中に、相手を尊敬する誠実な関係が生まれます。

強権発動、命令、抑圧、決めつけを、日常の生活の中からすべて除去できたとき、本当の意味で、風通しのよい学校の雰囲気、民主的で、かつ、人のぬくもりを感じさせる教育が実現するのです。

6. 問題行動に対する対処方法

【先生の注目を引く】ために問題行動をしている場合

子供の好ましくない行動に、関心を示さないようにしましょう。子供の好ましい言動に、関心を向けます。「いつも注目の的でないと不安だ。」というのは間違った考え方なので、子供がそのように思い込むことのないようにしましょう。

【力を誇示する（先生に主導権争いを挑む）】ために問題行動をしている場合

子供が闘いを挑んでいたとき、先生は、その闘いから降りてしまいましょう。力で押さえつけて先生が勝っても、「やっぱり力があるのがいいのだ。」と子供は思うだけです。子供は、自分の能力を認めて欲しいのですから、その能力を認めてしまえば、問題は解決します。学校（学級）の中のすべてのことを決めて、指図するのをやめて、子供にもルール決定に参加してもらい、学校（学級）の中の仕事を手伝ってもらうようにしましょう。手助けをお願いするのです。「貢献するのは、喜ばれることだし、気分の良いものだ。」ということを経験してもらおうのです。そのことで、子供は自己評価を高めますので、好ましくない言動は不必要になります。

【復讐する】ために問題行動をしている場合

第一に、先生が「傷つけられた」と思わないことです。思っても言わないことです。そのような素振り子供に示すと、子供が「目的を達成した」と気付くからです。次に、子供は「自分が愛されていない」と思い込んでいますから、たくさんの機会を捉えて「そうではない」ことを伝えなければなりません。子供が「自分は愛されている」ということを確信できないと、この段階は解決できません。

【無気力・無能さを示す】ために問題行動をしている場合

まず、周りの者が、批判的な言動を、一切、やめることです。同時に、どんな些細なことであっても、子供が貢献したり、建設的に行動したりしたことに関心を示し、それを認めて、勇気付ける必要があります。

短所や欠点も指摘せず、逆に、長所や、できていることにだけ、関心を向けます。

この段階の子供は、とても「くじけやすい」ので、少しでも批判を受けると、この段階に留まってしまいます。めちゃくちゃにたくさんの勇気付けが必要なのです。

7. 振り返るポイント

子供の教育は、いつでも大変です。特に、子供の「好ましくない行動」を見ると、イライラしたり、腹を立ててしまうことも多いでしょう。そこで、日頃、先生としての自分が、子供に対して、どのような気持ちを抱いているかを確認してみましょう。下のチェック項目のいずれかに、自分の気持ちが多く割かれてしまっていることはないでしょうか。たくさん該当するほど、自分の子供との関わり方には、問題が大きいのです。

先生の「自己診断項目」

- いつも子供の行動にイライラしている。癪に障る（しゃくにさわる）と思っている。
- 子供を「恥ずかしい」と思っている。
- 子供の性格が、自分の嫌いな誰かに似ていると思っている。
- いつも子供を比べている。
- 気付かないうち子供を無視したり、遠ざけたりしている。
- 面と向かって罵倒する
- 脅してコントロールしようとする。

子供に不満のある先生は、もともと、自分に不満があるといます。逆に、自分に対して満足して、自信があれば、子供を受け入れられるし、「良い先生」でなくちゃ、と必死になることもなくなります。子供の問題行動の背景には、子供に対する先生の「態度」と「姿勢」があるのではないかと考えるのです。

人間には、変えられない性格があります。不安が強かったり、不満感を持ちやすかったりといった自分の傾向は、そうは変えられません。しかし、子供との関わり方・スタイルは、先生の思い次第で変えられます。

子供の問題行動に「好ましくない」ものが多かったり繰り返されたりしているのであれば、これまでのやり方を続けても、【改善する見込みはない】と考えるほうが合理的です。子供との信頼関係を取り戻し、これまでよりも、うんと楽しい関係を再構築する決意をしましょう。それは、誰にでも、今日からでも、できることなのです。

8. 子供の状況から分かる先生の態度

子供の状況を、冷静に観察してみましょう。子供の「好ましくない行動」の背景には、先生の不適切な態度が原因になっているかもしれません。日常の子供との接し方で、どこを改善すればよいかを見つけてください。

子供の状況	背景にある先生の態度
<input type="checkbox"/> 無責任になりやすい。 <input type="checkbox"/> どうせ誰かがしてくれるからと、自分では何もしない。	①過保護
<input type="checkbox"/> 無責任になる。 <input type="checkbox"/> 満たされていないという感情が出ていて、要求ばかりしている。	②過度の放任
<input type="checkbox"/> 自分には価値が無いと考えている。 <input type="checkbox"/> 愛される値打ちがないと思いつている。	③拒否的
<input type="checkbox"/> 自信を持ってなくなり、不安になっている。	④憐れむ
<input type="checkbox"/> 勝手気ままに暮らせばよいと考えている。 <input type="checkbox"/> 人を信頼しなくなっている。	⑤一貫しない
<input type="checkbox"/> 悲観的になっている。 <input type="checkbox"/> 内気で皮肉を言う。 <input type="checkbox"/> 罪悪感を抱きやすくなっている。	⑥あざけり・軽蔑
<input type="checkbox"/> 権威をやっつけようとする。 <input type="checkbox"/> 力に頼って強引に自分したいことを押し通そうとする。	⑦権威的
<input type="checkbox"/> 戦う姿勢が強い。	⑧強圧的
<input type="checkbox"/> 恐れが強い。 <input type="checkbox"/> 不安が強い。	⑨おどす
<input type="checkbox"/> 人を非難する。	⑩批判的
<input type="checkbox"/> 自分の能力に落胆しやすい。	⑪高望みする
<input type="checkbox"/> 負けることを恐れる。 <input type="checkbox"/> 「最善」になろうと頑張るが、できないと「最悪」になろうとする。	⑫競争過剰

子供を見れば、自分がどんな先生だったのかも分かるのです。子は先生の鏡なのです。これは、実は朗報です。先生が代われば、子も変わるのであります。

9. 好ましくない先生の言動について

日常の、子供への言葉の投げ方のチェックをしてみましょう。下の表のような言葉が多いのであれば、注意が必要です。

分類	具体的なことば
①過保護	<input type="checkbox"/> 「あなたにはまだ無理だ。」 <input type="checkbox"/> 「先生がやるから、あなたは、〇〇しなくていい。」
②過度の放任	<input type="checkbox"/> 「あなたの好きにきなさい。」 <input type="checkbox"/> 「もう、勝手にきなさい。」
③拒否的	<input type="checkbox"/> 「なんてイヤな子なの。」 <input type="checkbox"/> 「あなたはこの学校に通う資格はない。」
④憐れむ	<input type="checkbox"/> 「あなたって可哀想な子ね。」
⑤一貫しない	<input type="checkbox"/> 昨日と今日で、逆のことを言ったりする。 <input type="checkbox"/> 気分次第で、許したり、許さなかったりする。
⑥あざけり・軽蔑	<input type="checkbox"/> 「あなたって本当にダメだね。」 <input type="checkbox"/> 「何をしても、ダメな奴だな。」 <input type="checkbox"/> 「こんなこともできないの。今まで何をやってたんだ。」
⑦権威的	<input type="checkbox"/> 「先生の言う通りにしていれば、間違いないんだ。」 <input type="checkbox"/> 「先生の言う事が聞けないのか。」 <input type="checkbox"/> 「子供のくせに、生意気だ。」
⑧強圧的	<input type="checkbox"/> 「だまって言う事を聞きなさい。」 <input type="checkbox"/> 「理由なんか聞かない。だめなものはだめだ。」
⑨おどす	<input type="checkbox"/> 「これができないのなら、〇〇は禁止するからね。」 <input type="checkbox"/> 「これをやらなかったら、〇〇をあげません。」 <input type="checkbox"/> 「これをやらなかったら、どうなるか、わかっているな。」 <input type="checkbox"/> 「こんなことをやっていたら、どうなると思う。」
⑩批判的	<input type="checkbox"/> 「なんて意地悪な子なんだ。」 <input type="checkbox"/> 「なんて強情な子なの。」 <input type="checkbox"/> 「誰に似たんだ。親の顔が見たい。」 <input type="checkbox"/> 「あなたは、いつも間違っただけだね。」
⑪高望みする	<input type="checkbox"/> 「これくらいできて当たり前だろう。」 <input type="checkbox"/> 「これくらいのこと、できるはずだろう。」
⑫競争過剰	<input type="checkbox"/> 「〇〇さんができるのに、何であなたはできないの。」 <input type="checkbox"/> 「〇〇さんは、もうできるわよ。あなたができて当たり前よ。」 <input type="checkbox"/> 「勝ち負けにこだわれ。一番（100点）以外は意味が無い。」 <input type="checkbox"/> 「いつもお前は一番遅いな。」

10. 「叱る」ことをやめましょう

(1) なぜ、叱られるようなことをするのか

子供が問題行動を取る場合、その背景には「叱られる事で先生の注目を得たい」という「陰の目的」があります。これは、問題行動をとっている子供が意識する、しないに関わらず、大抵の場合、当てはまります。したがって、先生、子供の不適切な行動に注目して腹を立てたり、叱ったりすることは、子供の意に沿う形となるので、何度叱っても怒鳴っても、行動が改善することはないのです。

そんなことはない、という反論があるかもしれませんが。子供を叱る事は、先生の正当な権利であり義務であると考え、叱らなければ、子供の行動を適正に導く事はできない、と考える先生は多いと思います。

しかし、叱ることそのものが「有効」な、あるいは「適切」な方法であれば、子供は一度、叱れば、その叱られた行動を二度と取らなくなって良いはずですね。

それにも関わらず、同じことが繰り返されて、その度に、同じように何度も叱るということなのであれば、それは、

- 叱り方が足りない
- もっときつく叱れば問題行動をやめるはずだ

と考えるよりは、

- 叱る、という方法そのものに、改善の余地がある、と考えるほうが論理的です。

子供は、行動を変える事を先生から強いられた、と思ったとしたら、いつかまた、叱られるようなことをやってみようと機会をうかがっています。

子供は、叱られたくて、悪い事をしている、というのは、少し、信じがたいかもしれません。不適切な行動をやめられない子供の意識は、どういうものなのでしょう。少し詳細に記述してみます。

自分は、適切な行動を行っても、先生からは大した注目を得られない。ちゃんとやっても当たり前だと思われるだけで、自分が認めてほしいと思って取った適切な行動は先生の注目に値しない。せめて、叱られることでもしなければ、自分は、先生に注目してもらえないに違いない。

叱ることは「百害あって一利なし」です。「叱ったおかげでこの子は、より良く成長したのだ。」と考えるのは間違いで、むしろ「不適切な育て方をしてもよく育ってくれた。」と感謝すべきなのです。

(2) 子供は叱られるとどうなるのか

先生が子供を叱ってばかりいると、子供はどうなるのでしょうか。

まず、先生の顔色をうかがうようになります。

ものすごくきつく叱れば、子供は先生に叱られるようなことはしなくなるかもしれませんが、

積極的に適切な行動をするようには、ならなくなります。

そして、やがては、

先生のみならず、他の人の顔色も気にかけるようになり、自分の判断では行動しなくなります。

人間は「ここにいてもいい」と感じることができるときを切望しています。叱られると、

ここに自分の居場所はないと感じることになります。

そうすると、叱る先生と子供との心理的な距離が遠くなってしまいます。関係が近くなければ、子供を援助することはできません。叱られ続けた子供は、その結果、

先生のいうことが正しくても先生の言葉に従わないでおこうと考えるようになります。

「先生の言う事に従えば、負ける。」と考えるからです。そうなってからでは、将来、子供が何か間違ったことをしていることに気付いたとしても、

先生が子供に語りかける言葉は、子供に届かないのです。

先生が本当に怖ければ、そういう先生に対して、子供は、積極的に反発しないかもしれませんが。しかし、裏に回って、先生が嫌な気持ちになるようなことをするようになります。先生にきつく叱責されている間に、子供は、こんなことを思うでしょう。

「これを忘れてなるものか。」

そして、「復讐」の機会を伺います。子供と先生の力は、近い将来必ず逆転します。かならず、その「時」が来るでしょう。「復讐」の段階まで来てしまうと、生徒と先生の関係の修復は、非常に困難になります。

先生が子にしなければならないのは、「叱る」ことではなく、「叱られるようなことをして注目を引こうとしなくてもいいということを教える」ことです。

むしろ、叱ることが必要でないくらい、子供が先生に、ちゃんと見守られている事を実感できるように働きかけることが必要なのです。

11. ほめることの弊害

アドラーは、ほめるという行為を、奨励しません。それは、ほめるという行為を「能力のある人が、能力のない人に対して、上から下に向かって下す【評価】である」と考えるからです。世の中の誰が、対人関係において「下」に置かれること望みますか。誰かが、他の誰かをほめることができるとすれば、その人を、自分よりも「下」に見ているということになります。「ほめると子供は喜ぶ。」
「子供はほめられれば適切な行動を継続的に行うだろう。」と期待する先生は、自分と子供との関係を対等と捉えていません。上下関係を前提として「子供を自分の思惑どおりに操作しよう。」としていなかったかどうかをチェックしてみてください。

叱らずに、ほめて育てよう、という教育法はありますが、ほめることには、実は弊害があります。それは、

ほめられないと適切な行動をしない。

ということに尽きます。目指すところは、「たとえ誰にも見られていなくても、適切であるかどうかを自分で判断して行動」して欲しいのです。

子供をほめる際に、問題となる先生の態度は「子供を自分と対等な存在とは考えていない。」というものです。このように考え、感じている先生は、「私が面倒を見てあげないと、この子供は何もできない。」と考えて、過干渉、過保護に接してしまう傾向が強いです。

子供を大人よりも劣っているとみるのではなく、対等と見て、見下したり評価を下したりすることがなくなれば、子供との関係は、劇的に改善します。

子供が、先生から見て適切な行動を取っていることに注目することは、もっとも重要なことです。しかし、良い面に着目することと、「ほめる」ということは別物です。

ほめるというのは、上下関係を前提としている、ということを指摘しておきます。

12. 賞と罰による教育の問題点

これまで学校では、先生の言う事を聞いたり、好ましいことをすれば褒美を与え、言う事を聞かなかったり、いけないことをしたりしたら叱ったり罰する、というやり方を取ってきました。ほとんどの学校で、このやり方が行われているようです。私たち先生も、子供の頃、そうして育てられましたね。私たちも、また、その両親も、ずっと、このやり方で育てられたのでしょうか。こうした、世代を超えて、同じやり方を踏襲してきたわけです。社会全体が、すべて上下関係で決められていた時代では、このやり方でよかったですし、うまく機能した場面もあったと思います。ですが、現代の日本社会は、戦前と比べて大きく変化しました。人間関係もわかりです。しかし、教育の仕方は、なぜか変わっていませんね。

では、現代社会、学校において、上下関係を前提とする教育を行う事の問題点とは、何なのでしょう。それ次の二つの観点から説明します。

- 子供を罰を与えること副作用
- 子供に褒美を与えることの副作用

(1) 子供を罰することの副作用

【副作用①】

すべての罰は、学校が勝手に決めています。先生の感情も入っています。「そんなことをすると、行事には参加させません。」というように、子供の行為とは直接関係のない罰がほとんどです。罰は、子供を脅して、先生に絶対服従をさせているのですね。日本は法治国家ですので「このような行為をすれば、これだけの罰を加える。」とはっきり決められています。ですが、学校内では、先生が権力者であり、先生の思うままに罰が決められ、増やされていきます。このような関係が続くとどうなるのでしょうか。

自分のやった行為に比べて罰が厳しすぎると子供が感じれば、あるいは、他の人と比べて自分には厳しすぎると感じれば、「先生は不当だ。」と思い、反発心を持ち、反抗をするようになるでしょう。

また、それが軽いと感じれば、「罰なんてどうってことないさ。」と考えて、いけないことを続けようとするかもしれません。「決まりなんて、どうでもいいのさ。」とってしまうのです。

【副作用②】

罰を受けた子供は、これが他人との使い方なのだと学ぶ事があります。「力が正義」であり、力だけが意味があると考えられるのです。大人になっても、そのように考えている人を見ますね。そういう人は、今度は、自分が罰する側になろうとします。弱い子をいじめるとか、動物に乱暴する子供がいますが、そういう子たちは先生や親から、よく罰せられているかもしれない、と考えるのです。そんな子供は、いざれ力がつけば、やがては先生や親を罰するようになるかも知れません。

【副作用③】

子供が小さい頃は、厳しい罰は必要ないでしょうが、成長すれば効果がなくなります。したがって、罰はどんどん厳しいものになります。しつかに罰を使っていれば、これは必然です。中学生になった子供に体罰を加えている場面を想像してみてください。どんな暴力場面でしょうか。そして、子供が罰を恐れなくなれば、どのようになるでしょうか。

【副作用④】

罰を加えれば、好ましくない行動は一時的には無くなるでしょう。しかし、それは罰が恐ろしいから止めただけです。決して好ましい言動をしようと考えたわけではありません。

罰は、過去の言動を問題にしているので、罰では、何が好ましい言動なのかは分かりません。好ましい言動を、自ら取れるように支援するのに、罰を与えることは有効だとあなたは考えますか。

罰を与えれば、罰を避けるために嘘をついたり、だましたり、見つからないようにしようとするでしょう。先生と子供の信頼関係は損なわれ、教育の目的を達成できませんね。

罰が加われば加わるほど、子供は先生を憎むようにさえなるでしょう。

【副作用⑤】

罰は、子供を落胆させ、やる気を失わせます。悪い成績を取ったり、失敗したりすることによって罰が加えられるのであれば「しなければ良かった。」と考えて消極的になったり、自分で判断することをやめて依存的になります。さらに、子供が、悪い事をしてでも先生の注目を得たいと考えていたならば、罰を加える事は子供の好ましくない言動を継続させる結果になります。

(2) 子供に褒美を与えることの副作用

【副作用①】

先生が褒めるときとは、先生が望ましいと考える事を、子供がしたときですね。これは、先生が、子供の行動を上から目線で評価するという上下関係になっています。子供の価値は「先生の言う通りにできるかどうかで決まる。」あるいは、「人を喜ばせるときにだけ、自分には価値がある。」と子供は考えるようになるかもしれません。

人に褒められようが、認められなからうが、その子供は、生きているだけで、すでに尊敬すべき存在なのだと教えたいですね。

【副作用②】

褒める基準は、先生が決めます。その基準は、子供の現実と合致しているでしょうか。先生の基準が、いつも他の人より抜きん出していないと価値がない、というものであれば、子供は他人のことなど構わない野心過剰な人間になるでしょう。また、結果だけが大切と先生が考えていると、子供は失敗を恐れるようになります。負けそうだとか、失敗しそうなことには、手を出そうとしなくなるでしょう。

【副作用③】

褒美の効果は、少しずつ薄れていきます。大きな満足を得るためには、大きな褒美が求められるようになっていくでしょう。褒美が満足なものでなければ、好ましい言動を行わないといって、先生を脅すようになります。

章と罰による、旧来のやり方には、問題が多いのです。このような弊害のないやり方を採りたいのです。

13. 勇気付け

叱ってもだめ、ほめてもだめ。では、どうすれば、子供を健やかな育ちを援助することができるのでしょうか。アドラー心理学ではそれを「**勇気付け**」といいます。

これは、実にシンプルな2つのキーワードにより行います。

「ありがとう」 「助かった」

子供に「ありがとう」という言葉をかけるとき、それは、叱ったり、ほめたりする事と違って「勇気付ける」ことになります。

(1) 勇気付けとは

子供たちは、生きていくに当たって、人生の様々な課題に直面します。勇気付けは、子供が**人生の課題を自力で解決できるという自信を持てるように援助すること**です。

(2) 勇気付けの効能

「ありがとう、たすかった」の言葉は、子供の【貢献】に注目することです。子供は自分が、他者に役立つ存在であること知り、自分の「居場所」を見つけます。自分の【貢献】に注目された子供の心には、良い兆しが芽生えます。それは、

- 他者に【貢献】できる自分を好きになることができる。
- そのことで得られた自信をテコにして、自分が解決すべき課題に対して、そこから逃げずに立ち向かうことができる。

ようになるのです。

しかし、「ありがとう」「たすかった」の2つの言葉が、完全無欠の魔法の言葉と過信するわけではありません。一番確実なのは、こうした言葉がけをした後で、子供に尋ねることです。

「今の言葉、どう思った？」

という感じです。勇気付けている「つもり」は通用しません。最初は、試行錯誤を重ねて、学んでいくしかありません。そのうち、上手に勇気付けの言葉をかけることができるようになればいいのです。

(3) 勇気をくじかれると子供はどうなるのか

アドラーは「自分に価値があると思えるときにだけ、人間は勇気を持てる。」と語りました。

子供は「人生の課題に立ち向かう事ができない。」と思ったとき、「自分には価値がない。」と思うのです。このように、「立ち向かえない。立ち向かいたいたくもない。」という思いが最初にあって、その思いを正当化するために、「自分に価値が無い」ということを持ち出してしまふのです。

人生には、解決困難な課題もあると思います。そういう課題に直面したとき、「何もしない」のではなく「できることをする。」という姿勢を、子供には持って欲しいのです。

「課題に向かわないでおこう。」と意気消沈している子供は、それを自他共に「やむをえない」と認められる方法を使って、自分の価値を低く見せます。このような状態になってしまった後では「自分に価値がある。」と思えるようにする援助(=勇気付け)は、かなり難しくなります。

勇気をくじかれた子供は、「自分のことを、好きにならないでおこう。」というほど落胆しています。そうすることで「積極的に他者との人間関係を築かないでおこう。」と考えているのです。

(4) ほめたり叱ったり…の結果

ほめたり、叱ったりして育てられた子供は「人からよく言われたら喜び、悪く言われたら悲しんだり怒ったり」します。自分の価値が、他者の評価によって変動してしまいます。これは、本来あるべき姿ではありません。自分の価値は、他者からの評価と依存しないからです。

逆に、よく勇気付けられた子供は、他者からの評価に捉われず、自分を実際よりもよく見せようとはしません。世間で「あの子は、しっかりしている。」と見られる子供は、自分の価値を、他者の評価に委ねないので、「しっかりした子、自立した子」に見えるのです。

(5) いかに勇気付けるか

いかに、勇気付けの仕方について、具体的に見てみましょう。

①子供の存在そのものを、価値あるものと認識する

良い子はいるけど、悪い子はいらない、というのでは話になりません。生まれてきてくれたこと、生きていてくれることに、まずは感謝しましょう。子供が健康に生きてくれていることは、先生にとって最も感謝すべきことなのです。子供の存在そのものに尊敬の念を抱くことが出発点になります。子供を尊敬するのに、理由は不要です。

例：「あなたがクラスにいてだけで、みんなが笑顔になるね。」

②子供扱いせず、人間扱い

子供と大人は、対等です。どちらが上でも下でもありません。「どうせできないだろう。」「先生がやって（守って）あげなければ。」という姿勢は、子供の能力を過小評価している証拠になります。能力がないと「叱る」、子供に評価を下して「ほめる」、は、子供を下にしています。独立した対等な人間関係であれば、色々なことが、すべて変わってきます。

「命令・強制」ではなく、「お願い・依頼」

「威圧・脅迫」ではなく、「励まし」

「ほめて評価を下す」のではなく、子供と感動を「共有」

というふうに、すべての関わり方が、変化するはずです。

「お願い・依頼」は、子供に「断る」という選択肢を与え、断られた場合、先生はそれを受け入れる、ということです。それこそが「対等」の意味です。

例：「おい、これをやれ。」ではなく、「これを、お願いできる？」

例：「これができなかつたら、許さないぞ。」ではなく、「こうすれば、きっとできるよ。」

例：「よくやったな。それでいいんだ。」ではなく、「すごかったね。感動したよ。」

③短所を長所と見る（適切な面に目を向け、不適切な面に注目しない）

子供の短所と見てきた側面を、長所と捉えます。

- 性格が「暗い」 → ○性格が「やさしい」
- 集中力がない → ○散漫力がある
- あきっぽい → ○決断力がある

●忘れっぽい → ○集中力がある

子供が自分の短所と思っていること、正確に言えば、先生の影響で、子供が、自分の短所はこういうものだ、と思いこんでしまったものを、「そうではないのだ。あなたが短所と考えているモノは、実は、あなたの長所なのだ。」と捉えられるように援助してください。

例：「あなたは、暗いんじゃない。本当は、優しい子なんだよ。」

例：「あなたは、あきぼっぼいんじゃない。いろんなことに興味を持てる子なんだ。」

④子供の貢献に注目する

他者との対人関係を積極的に築くという決心ができるためには、「他者との関係を築く事が、自分にとって有用である。」ということ、はっきりと理解されなければなりません。

「家族から与えられるだけではなく、自分もまた、他の家族に与えている、貢献している。」と感じられることによって、自分が家族に「所属」しているという感覚を持つ事ができるのです。

そして、自分が誰の役にも立たないのではないのではなく、他の人に役立てていると感じられるとき、そんな「自分に価値がある。」と思え、自分を好きになれるのです。

「ありがとう。」は、それを言われた相手が「人に役立てた。」と思い、そのことによって「自分に価値があると思って欲しい。」という願いが込められた「勇気付け」の言葉であるときに、初めて子供の心に届きます。

逆に、「次の機会にも、適切な行動を期待する。」という作為・思惑が込められた場合、それは、勇気付けにはなりません。そういう作為が伝われば、せっかくの適切な行動も、一時の気まぐれで終わるか、あるいは「ありがとう。」と言われることを期待して行動し、お礼を言われなければ、良い行動を取ろうとはしなくなるのです。

例：「大成功したのは、〇〇さんおかげだよ。」

例：「手伝ってくれて、とても助かったわ。」

例：「ありがとう、おかげで早く片付いたよ。」

例：「〇〇さんのおかげで、とても楽しかったわ。」

⑤子供を信頼する

子供は、課題を達成できると、まずは信じてください。子供が何かを「できない」と思ったら、それは「できなのではなく、やらないという決心をしている。」と考えるのです。「あなたは、やればできるのよ。」とは言わないほうがよいです。これを言われた子供は、「やってもできなかったという結果を見るより、やらないで失敗しないでおこう。」と決心します。なぜ「できない」自分を見せている

のか、その背景にあるのは、勇気のくじきです。重要な事は「信頼」をし続けることです。自分を信頼し続ける人を、いつまでも裏切る事は、大抵の子供にとって容易なことではありません。

例：「〇〇さんなら、〇〇はきっとできるようになると思うよ。」

⑤努力と進歩を認める

子供が能力を伸ばすためには結果がどうであったか、ではなく、どのように努力したのか、どれだけ進歩したのかに着目して、認めることが大切です。

例：「すごく頑張っているんだね。」「夢中でやってたね。」

例：「よく考えたんだね。」

例：「ずいぶん上達したと思うけど、自分でもそう思わない？」

・・・

このように、勇気付けは、子供がどのようなであって、あるがままを受け入れ、子供の長所やできたことに視線を投じることなのです。そして、先生が、心から喜んで伝えることが大切です。子供の短所や欠点を取り上げて指摘したり糾弾したりしても、やる気を削ぐだけで、有用な行動を自分からとれる子供には育ちません。

子供の「存在」そのものを「尊敬」してください。そうすれば、子供は自分を大切に使うでしょう。そして、自分の能力を自分のためだけでなく、みんなのために使うことが大切だと学ぶでしょう。

失敗したときこそ、勇気付けが必要です。人間は失敗するものであるということを先生が認め、それまでの子供の努力を認めましょう。落胆している子供には、「がっかりだよね。」と子供の心に寄り添い、これからどうしたらよいか、相談に乗らしましょう。人間は失敗から学びながら、成長するのですよね。

14. ケーススタディ ～ 教室掃除をいつもサボっている子供への対応

では、良くない行動を継続的に取る子供の行動例として、次のような例を考えて、これを適切な行動に導くための援助の仕方について、考えてみましょう。

A君は、最近、掃除をまじめにやらない。ほうきを手にして、友達を叩いたり、突っついたりして、悪さばかりしている。先生が注意すると、少しは掃除をするが、いないところでは、すぐにサボって遊んでいる。ついに先生は、A君に、「何度言ったらわかるんだ。」「いい加減にしろ。」「もう、掃除なんかしなくていい。」などと怒鳴ってしまった。

人間の行動には、その背景に、必ず「目的」が存在します。この「目的」は、子供の中に明確に意識されている場合もありますが、精神的に幼い子供は、その目的を意識しないで、その意図しない「目的」に向かって行動を取る事もあります。

このケースでは、子供の「目的」には、どんなものがあるのか、想像してみましょう。アドラー心理学では、この隠された「目的」を次のように捕らえます。

A君は、掃除をサボる事で、先生の注意を引きたいと思っている。(仮説です。確かめてみましょう。)

このような目的で行動している子供の行動には、どこに問題があるのでしょうか。この子供は「不適切な行動」を取る事で「先生の注意・関心」を集めることができる、と考えていますね。それこそが、問題の本質である、と考えるのです。

このケースで、先生は、その子供の「目的」をかなえる方向で、子供の不適切な行為に注目し「かまって」あげています。このような「働きかけ」を続けていても、この好ましくない行動(=怒られないと宿題をやらない)は改善されません。

では、具体的に、この子供が、自ら積極的に掃除に取り組むようにするには、どうすればよいのでしょうか。

【ステップ1】子供の「目的」を探る

先生：「A君。最近、掃除を全然しないね。」
A君：「掃除なんて、めんどうだし…。」
先生：「A君が掃除をするのは、先生が怒ったときだけかな？」
A君：「え？別に。掃除なんて、女子がやればいいんだよ。」
先生：「なるほど。女子が掃除をやってくれたら、自分は遊んでいられて嬉しいのかな？」
A君：「だって、先生は、女子が掃除すると褒めるけど、僕がやっても褒めたことないでしょ。」

おっと、ここで、隠されたA君の目的が、見えてきたかもしれません。

先生：「A君は、先生が女子の掃除を褒めて、A君のがんばりを認めなかったと思っているの？」
A君：「そうだよ。僕なんか、やってもやらなくても、どっちでもいいんだ。」
先生：「それで、A君は、掃除をする気持ちがなくなってしまったの？」
A君：「別に…。」
先生：「先生は、A君に謝らないといけないね。すまなかった。先生は、そんなつもりはなかったけど先生の態度を見てA君がそう思ったのなら、申し訳なかった。ごめんね。」
A君：「そんなこと言われても…。」
先生：「A君も、嫌な気持ちでいたんだね。でも、気持ちを話してくれてありがとう。A君の気持ちがわかって、うれしいよ。」

と、こんなふうに、冷静に話し合いをする感じで会話を進めてみると、子供が自分から「目的」を教えてください。子供の不適切な行為には、かならず「目的」があります。それを理解することが、解決の糸口になります。

このケースでは、「先生に自分が頑張っている姿も認めてほしい。」という思いが、A君にあったのですね。A君が掃除をさぼる目的は、「先生の注目を得たい。」というものだったのです。であれば、A君のよくない行為に着目して、叱っていても、問題は解決しないわけです。

少し、注釈します。

子供の抱える問題のほぼ100%は、対人関係によるものです。友達との喧嘩、仲間はずれ、いじめ、厳しすぎる先生との確執、といったことが問題になるのです。

□しかし、学校生活に問題が見出せない場合は、親子の関係が問題になっているかもしれません。お母さんが弟や妹ばかりかまって、自分を見てくれない、というようなことがきっかけとなり、せめて先生には、かまってほしい、というような可能性も疑ってみましょう。

このケースでは、「A君には掃除する能力がない。」というわけではないですね。

【ステップ2】善後策を子供と話し合う

先生：「A君。先生は、A君がちょっと前まで、先生がいないときでも、しっかり掃除をやってくれていたことは知っているよ。廊下からA君が頑張ってくれていたのを見ていたんだよ。低学年の子にも、雑巾の使い方を教えてあげてくれていたよね。先生は、すごく嬉しかったよ。」
A君：「え？ そうなの？」
先生：「A君が、掃除班のみんなをまとめてくれていたのも知っているし、反省会もしっかりやっていたよね。」
A君：「じゃあ、何で女子ばかりほめたの？ 僕だってやっているのに。」
先生：「うん。わかった。それは、先生が悪い。申し訳ない。」
A君：「じゃあ、もういいよ。これからは、ちゃんとやるよ。」
先生：「ありがとう。助かるよ。一つ、聞いてもいいかな。今回、A君は、先生が女子をひいきしたと思ったから、そうじをさぼっていたって言っていたけど、それ以前は、すごくまじめにやっていたよね。どうして？」
A君：「別に、先生を喜ばすために掃除をしているわけじゃないからね。」
先生：「え？ どういうこと？」
A君：「教室が汚かったら、掃除するのは当たり前でしょ。」
先生：「そっか。そうだな。そんなにしっかり考えてくれていたんだね。先生は、ちっともA君のことを分かっていたなかったんだな。」
A君：「もう、いいって。これからは、ちゃんとやるから。」
先生：「そっか。サンキュー。先生は、これからどうしたらいいかな。何か先生にできることはあるかな。」
A君：「別にないよ。先生がくると、よけいややこしいことになるから、僕たちに任せてよ。」
先生：「わかった。A君たちは、もともと、掃除はしっかりやってくれていたんだ。それにいちいち、口を出さないようにすればいいのかな。この掃除班の別の子達がサボっているときは、先生が注意してもいいの？」
A君：「それは、僕の仕事だよ。僕が言っても聞かないときは、先生にお願いするかもしれないけどね。とにかく、そういうわけだから、先生、もう、他のところの見回りに行ってくれる？」

いかがでしょうか。子供に、何かを強制したり、脅迫したりせず、先生の立場や気持ちを、冷静に子供に伝えてみましょう。あくまで、相手は、自分と対等な人間であるという姿勢で接して、民主的に話し合うのです。

民主的な話し合いでは、双方が相手に「ノー。」と言える選択肢を与えながら話し合いを進めることが重要です。「いやだ。」と断るという選択肢が与えられると、子供も感情的に反抗することはなくなります。

【ステップ3】新ルールの運用

一度、子供と決めたルールは、先生の都合で勝手に変更したり、取り消したりすることはできません。A君は、掃除をしっかりとる、先生は、A君が困って相談に来るまでは、いちいち、口出しをしない。そうした取り決めを、誠実に、愚直に続けていきます。

たとえば、A君が、以前のようにしっかりと掃除をやるようになったら、次のような会話をしてみてください。

先生：「お。この教室、めちゃくちゃきれいになってるね。ありがと〜。」
A君：「何、先生。何か用？」
先生：「いや、ここの掃除班は、みんなが協力してやってるな、と思ってさ。」
A君：「そんなの当たり前。先生がいちいちグチグチと言うと、やる気がなくなるんだから。」
先生：「いやいや。申し訳ない。なあ、先生も、なんか、手伝ってもいい？ A君のおかげで、教室がすごくきれいになっているから、うれしくて。先生も何かやらせてくれない？」
A君：「先生の仕事はないから…。はい。あっちに行つてね。」

こんな感じで、「ありがとう。」「あなたが…してくれたおかげで助かった。」といった「**勇気付け**」の言葉を、素直な気持ちで投げかけてみてください。子供は、自分の存在を認められ、自分のことをするのを自力で行うことが、周囲に良い効果をもたらすという「**貢献感**」を抱き、自分のことは自分でできるのだという「**自信**」を持つ事ができるのです。

「叱られることでしか、注目を得られない」という精神状態から180度転換して、子供は「**勇気付け**」によって、自分は学校（学級、掃除班など）の大切な一員であるという「**所属**」の欲求を満たしていきます。そうすれば、これまでの先生と子供との間の「**対立**」関係は解消し、信頼しあえる「**仲間**」になっていくのです。

このようにスムーズな展開が、いつも望めるとは限りません。何しろ、これまでの積み上げが、現在の困難な状況を引き起こしているのですから、もっと時間がかかることもあるでしょう。

しかし、絶望することはありません。「**できないと諦める**」より「**できることをする**」ことの方が、先生人生は楽しいのです。子供が笑顔でいること、成長してくことは、先生にとって至上の喜びです。

15. 教育に行き詰まったとき

先生を何年もやっていれば、ときには行き詰まりを感じたり、子供との関係がこじれてしまったりして、立ち往生してしまうこともあると思います。そんなとき、もう一度、初心に帰って、次のようなことを試してみてください。

(1) 子供の能力を信じる

子供が色々なことを判断して決める能力があると信じることで、子供に判断や決定を委ねてみることで、もし、不適切な決定や選択をしたときは、あなたの意見を言って考えてもらうか、やらせてみて、その自然な結末を体験させてみてください。子供は、自由に決断できれば、自分に自信をもちます。そして、子供の心の中に、責任感が養われるでしょう。

(2) 先生と子供は平等であると考え

先生は、子供を尊敬して、信頼することです。そのように子供と付き合うことで、子供の自立心が育ち、自分で決断ができるようになり、他の人を尊敬するようになることです。

(3) 先生も完全ではないのだと認める

完全な人など、いませんね。みんな、何らかの欠点や弱点や不完全な面をもって生きています。だからこそ、人間は生涯、学び続けています。

不完全な自分を受け入れてしましましょう。すごく生きやすくなりますよ。謙虚にもなりますし、相手の不完全さも受け入れられるでしょう。そうすると、子供の短所ばかりをとがめなくなり、ありのままの子供を認めて、受容できるようになります。

子供は、失敗を恐れず、何事にも挑戦する勇気を持ち、忍耐強くもなります。また、現実的に考えて、問題と取り組めるようになるでしょう。人の権利を尊重するようにもなりますし、自分にも、他人にも寛大になるでしょう。

(4) 子供だけが大切だと考えないこと

まず、先生であるあなた自身がハッピーであることを考えましょう。あなたがハッピーでなくて、子供がハッピーになれるわけがないのです。

どうしたら、子供と仲良くハッピーに暮らせるかと、思いをめぐらしてみましよう。

(5) 子供を助けよう

子供にとって、周りにあることは知らないことの方が多いのです。先生の助けが必要なこともたくさんあります。

だからといって、勝手に助ければよいのか、というとそうではありません。子供に頼まれもしないのに、ズカズカと土足で子供の課題解決のプロセスに踏み込むのは、トラブルの元です。

子供が自分でやれることを、子供に頼まれもしないのに、先生が代わりにやってあげてはなりません。それは、子供を「甘やかす行為」なのです。

何でも子供にトライさせて、子供が助けて欲しいと援助を求めてきたら、相談に乗ったり、アドバイスしたりすればよいのです。

...

これまで、「子供を変えよう。」と考えて子供に働きかけてきましたね。しかし実は「変わらなければならぬのは、先生の方だ。」ということなのです。先生が変わる事で、子供たちとの関係が改善してきます。そして先生は、子供のより良き支援者、助言者、そして仲間になることができるのです。

16. 参考文献

